

■ 展覧会概要

< 展覧会 開催のお知らせ >

この度、UNPEL GALLERY（アンペルギャラリー）において「星野眞吾賞受賞作品 東京展」を開催いたします。ギャラリー運営母体のあいおいニッセイ同和損害保険会社は、「地域密着」の行動指針に基づき、平成30年に愛知県豊橋市と包括連携協定を締結し、その具体取組みとして豊橋市・豊橋美術館主催の公募展「トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展」に協賛しています。

本年開催された第9回公募展では、入選した60点の中から、大賞、準大賞、優秀賞の3点をはじめ、審査員5名による各推奨作品5点が選ばれました。東京展では、これら計8点を展覧いたします。「従来の概念にはとらわれない日本画」という選考基準をくぐり抜けた力作を、是非ご覧ください。

タイトル	『星野眞吾賞受賞作品 東京展』
会 期	2025年1月9日（木）～1月30日（木） 11:00～19:00（月曜定休・最終日17:00まで）【入場無料】
会 場	UNPEL GALLERY 東京都中央区日本橋 3-1-6 あいおいニッセイ同和損保八重洲ビル 1F
参 加 作 家	八木 佑介（大賞）、木村真光（準大賞）、三上 今（優秀賞）、田中 寿之（審査員推奨 吉田俊英）、徐 浩然（審査員推奨 菊屋吉生）、松岡 勇樹（審査員推奨 野地耕一郎）、荒木 孝典（審査員推奨 三頭谷鷹史）、ム シスミ（審査員推奨 佐藤道信）
展覧会内容	愛知県豊橋市を活動の拠点とした星野眞吾は、生涯にわたって日本画の可能性を追求する作品を制作しました。また星野は、新進作家の発掘と顕彰のため私財を市へ寄附し、それが「トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展」開催のきっかけとなりました。 豊橋市美術館で開催された第9回展では、144点の応募作品から審査によって選ばれた大賞、準大賞、優秀賞の3点をはじめ、審査員5名による各推奨作品を含む入選作品60点が紹介されました。この度の東京展では、受賞作品8点をご紹介します。 「従来の概念にはとらわれない日本画」に挑んだ力作を、是非ご覧ください。
主 催	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
企 画	UNPEL GALLERY
特 別 協 力	豊橋市美術館

< ご連絡・お問い合わせ先 >

ギャラリーオフィス 11:00～19:00 月曜定休（担当 / 井上・内城）

E-mail / tsubaki@unpel.gallery <https://unpel.gallery/>

TEL / 03-3548-7780 FAX / 03-3548-7781 * お問い合わせは E-mail にてお願いします

■作家プロフィール

八木 佑介（星野真吾賞（大賞））

京都府出身、京都府在住

【コメント】

私は郊外で育ち、小学生の頃はこの国道沿いを隣町へ自転車で行くことが冒険でした。車の為に設計された郊外独特の殺風景な空間も私には慣れ親しんだ風景です。日本の片隅で移ろいと共にある今日の風景を描き、残したい。



「市街化調整区域」
2024 年制作 1303 × 1939 mm
木製パネルに綿キャンバス、砂、小石、
土絵具、岩絵具、膠、アクリル樹脂

木村 真光（準大賞）

岐阜県出身、東京都在住

【コメント】

私は乳児、植物を描くことを通して、生命の循環や生物の生命力、生命のきらめく瞬間のことを考えてきた。植物の生命力や儚さと子供の成長過程を融合させて描いている。



「いのちの舞い」
2024 年制作 1940 × 1300 mm
雲肌麻紙、岩絵具、染料

三上 今（優秀賞）

福岡県出身、東京都在住

【コメント】

欠けた記憶はいつしか想像で補われ、わたしの一部が投影されたものに成り代わる。しだいにあなたとの境界があいまいになって、わたしは、あなたが誰なのかわからなくなる。



「ファントム（ジャマイカソング）」
2024 年制作 1303 × 1939 mm
高知麻紙、綿布、くすみ染料、顔料、墨

田中 寿之（審査員推奨 吉田俊英）

大阪府在住

【コメント】

日々の生活の中で壊れて使われなくなり、それでも捨てられないモノ。時間と共に汚れ、傷み、破れ、壊れても補強し、縫い合わせ繋ぎ止めて使う。その中に見えてくる人の生活、時間、存在、他人には分からない思いを、画面の中に表現できるよう模索している。



「clothes」
2024 年制作 1620× 1620 mm
パネル、コラージュ

徐 浩然（審査員推奨 菊屋吉生）

山形県在住

【コメント】

私は過去に文人画や俳句が描かれた絵画など、文字を画面構成に取り入れる表現があることに気づき、興味深と感じました。しかし、このような絵画形式は紙や絹以外の材料ではほとんど見られません。そこで、複合的な支持体上でこの形式を借用し、「過去」から「現代」の可能性を探る試みをしています。



「島遊記」
2024 年制作 1620× 1303mm
寒冷紗、寒水粉、楮皮麻紙、石膏、敦煌土、岩絵具

松岡 勇樹（審査員推奨 野地耕一郎）

京都府在住

【コメント】

私にとって描くことは、自己が世界を獲得する行為です。一時期、事故と病気による利き腕の手術で描けなくなった私は、病室で見た雲の流動に「はじまりもおわりもない」と感じ左手で点描をはじめました。そして、医療に消費される豚の死を自覚した時、私と豚は分かち難いものになったのです。豚の皮膚の生きた痕跡を拾い、描くことで、描き手の「生」と遠ざけたいはずの「死」が生々しくあらわになったのです。こうして、「私の絵画」のはじまりと出逢うことができたのです。



「はじまりもおわりもない No.5」
2023 年制作 1640× 1140mm
豚革に点描

荒木 孝典（審査員推奨 三頭谷鷹史）

兵庫県在住

【コメント】

亡くなった母の書棚を整理しているときに、この作品の構想が
浮かんできました。

父や母が生きてきた時代に向き合う一つの方法として、私は絵
を描きます。



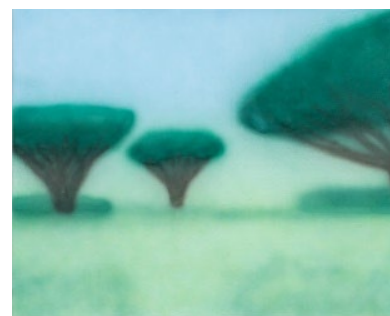
「1938年3月1日（記念の日に）」
2024年制作 1360×1680mm
杉板、膠彩

ム シスミ（審査員推奨 佐藤道信）

京都府在住

【コメント】

自然を主な表現の内容として、記憶の中の視覚情報をフィルタリングし、
外部世界の共通な経験、領域の部分を抽出し、非具象の開放的な
画面を通じて、元の客体を再構築する。



「image」
2024年制作 1620×1303mm
紙本着色、岩絵具、水干絵具